
黒猫ソラ

零桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒猫ソラ

【Nコード】

N8379A

【作者名】

零桜

【あらすじ】

黒猫は不吉を持つてくる。黒猫に対して良いイメージを持つてい
る人はあまりいないと思う。でも私の黒猫は違う。猫が好きなのに
は是非読んでもらいたい、そうじゃない人にはもっと読んでもらい
たいお話。

< 智美視点 >

私の飼っている黒い猫は我俣だ。

名前は【ソラ】。理由は、何時もいつも屋根に上って空を見るから。

我ながら単純だと思う。

ソラはいつも、朝の9時頃に起きて朝ごはんをだれ彼構わず要求するらしい。

私はいつも8時には家をでるので、ソラの分のご飯はちゃんと用意していくのだが何故だか気づかずに、隣の飯田さん家や大家さんの家に行つてご飯を貰う。

私がそれを知つたのは、久しぶりに私の仕事が休みの日だった。いつも通りソラのご飯を準備していると、9時にソラが郵便物を受け取るところから出て行っているではないか!!

「えっマジ!? ソラ、どこ行くの? ご飯だよ」

付いて行くと、廊下を通っている人々にご飯をねだっているではないか。私は流石に慌てて、そして恥ずかしくなり急いでソラを連れて家に戻った。

「駄目じゃん、ソラ。ちゃんとご飯作ってるんだから、こっち食べてくれなきゃ」

『だっていつもキャットフードは飽きるって!』

いきなりソラが私の目を見て口を利いた。私は驚きすぎて、呆然としている。

『猫だからって馬鹿にすんなあ。うちだって人間のご飯を食べたいんだぞ!』

ソラは私の腕の中で、ニャンニャン騒いでいる。それでも私が何も言えずにいると、仕舞いには顔を思いつきり引っ掛かれた。

「イタツいったーい! 何すんの!?!」

『うちの話を訊いてないからそうなるんだ！だいたい、いつつもちだけ置いていくんだもん。しかもご飯はキャットフード、同じ味のやつ。ああ可哀想な猫だなあ』

「そんなこと言っただって仕方ないでしょ！？私、一人暮らしだし料理だつて上手くないし・・・」

『だから彼氏の一人も連れてきたことないんだ？』

「むっソラがまだいかなかった頃は、居たの！別れちゃったんだから、この間」

ソラは信じていないような瞳で私を見た後、机の上のまだ手を付けていない私の朝食を食べ始めた。

「あー！！私の朝ごはん、なんで食べちゃうのよ！」

『話したらお腹が空いたの。智美はまた作って食べたら、いいじゃない。うん、意外とイケル』

「もう、意外とは失礼な猫！まっいいや、また作るから」

私は半ば諦めモードで、台所へと向かった。そして、トーストを焼いて目玉焼きとベーコンを皿に盛り付けて持って行った。

それを机に置いて、ソラの隣で食べ始める。まったく私の順応性の高さには自分でも驚くばかりだ。

猫がいきなり喋ったのに、普通に会話した後朝ごはんと一緒に食べてるんだから。

それから私は、家を出るときは必ずソラの希望を聞いて出来る限りの朝食を作つて出掛けるようになった。

家に帰ると話し相手のソラがいるので、寂しいと感ずることもなくなっていた。

私の住んでいるアパートの大家さんはもう随分と年で、私のおばあちゃん位の歳である。とても優しく、私が猫を飼いたいと言ったときも他の住人に許可を取りに行ってくれた程だ。

こんなにいい大家さんは、何処を探しても他にいないだろう。

『ねえ智美、あの大家さん病気じゃないかな？なんかたまに苦しそうなんだけど』

いつもの様に夕食を食べていると、ソラが突然そんなことを言い出した。ソラは私が仕事に行っている間は、近くの公園や大家さんのところに行っているらしい。

本人曰く、暇で仕方ないし私の負担を減らしているので一石二鳥らしい。

「そっか、心配だね。でも大家さんのもう歳だしねえ。今度大家さんに会ったら、訊いておこうか？」

『うん、それがいいよ。猫は不吉を予測するの得意だからさ、ちょっと心配で……。あの人猫に優しいし』

「そうだね」

<ソラ視点>

「まあソラちゃん、また来てくれたの？さあお入り」

うちはこの大家さんが大好きだ。部屋にいったら必ず入れてくれるし、なによりお菓子がすごく美味しい。

『ニヤア』

ボタンツ

「はい、どうぞ。今日のお菓子はねえ、親戚から頂いたゼリーだよ。甘くて美味しいからね」

『ニヤアオ。パクパクツ』

うちが食べてるのを、大家さんは嬉しそうに見ている。うちは不思議になって食べるのをやめ、首を傾げながら大家さんを見た。

「あらあら、ごめんね。あたしも食べようかね」

大家さんはニコニコ笑いながら、ゼリーを食べている。うちも何故か幸せな気分になってゼリーを口にはお張った。

やっぱりうちは、この大家さんが大好きだ。

そう思いながらうちは、夢中でゼリーを食べていた。すると突然……
「うっ痛い！！……はあはあ、嫌だねあたしも歳かね。ソラちゃん悪いけど机のうえの薬を取って貰えるかね」

大家さんが急に苦しみだした。いつもと何か様子が変だ。うちはその時、何故だかとても嫌な予感がした。

だから、大家さんが言ったとおり、急いで薬を取ってきてあげた。
「はあはあはあ、ありがとう。……ゴクッ」

薬を飲んでも大家さんの様子は一向に良くならない。うちはこのアパートの近くに小さな病院があることを思い出した。

お医者さんに見てもらえば良くなるかもしれない。

『ニヤア、ニヤアオ』

「はあはあはあ……そ……ら……ちゃん？」

うちは大家さんの部屋を飛び出した。そして病院へと急いだんだ。

じゃないと大家さんが死んじゃう気がして……。

キキーーーーッ

突然、耳に空を切り裂くような音が飛び込んできた。立ち止まって音のする方を見ると、今度は瞳の中に目が開けていられないほど眩しい光が飛び込んできた。

< 智美視点 >

「ソラ、ソラ？ソラ！！なんで……ソラ、いつもあつちは行かないじゃん」

ソラが死んだ。なんでか分からないけど、いつもは行かないはずの方に……行って……いて……軽トラックに撥ねられた。

軽トラックの人の話によると、急に走って飛び出してきたらしい。

「あたしを助けようとしてくれたのかねえ……ごめんねえ、智美さん」

大家さんはソラが死んだ日に、救急車で病院へ運ばれた。医者によると、一命を取り留めたのは奇跡に近いという。

「あたしが、ソラちゃんの命を取っちゃったのかもねえ・・・つう
つう」

「大家さん・・・もういいんです。ソラは大家さんのことが大好き
だったみたいだから。きつと天国で大家さんが生きてること、喜ん
でると思います」

それはただの、私の勝手な思い込みかもしれない。私がそう思いた
いだけかもしれない。

でも、そう思わないとソラのいない一人部屋に帰ることが出来ない
気がするのだ。

私が部屋に戻っても、もう話し相手のソラはどこにもいない。

あんなに生意気で我侭で、しかも話せる猫なんてどこを探してもい
ないのに。

なのに、何故だか私は寂しくなかった。それはソラが死んでから、
ソラのお墓やアパートの周りに猫が増えたせいかも知れないし、部
屋にたまにソラがいるような気がするせいかもしれない。

ソラのお墓は、ソラが好きだった大きな空が見えて私のいるアパー
トが見える丘に造った。その周りに沢山の猫がいる。そのほとんど
が、野良猫だ。

猫たちはソラが、寂しがり屋の私に贈ってくれたものかもしれない。
実はソラは、私のことを知らないようで一番知ってくれていたのだ
はないか。今になってそう思うようになった。

ソラはまだ生きている。私がソラのことを忘れない限り・・・
私の心の中で、ずっと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8379a/>

黒猫ソラ

2011年1月26日03時08分発行